

明治における西洋文化の受容

—サミュエル・ジョンソンの場合—（その3）

早 川 勇

3.4 ジョンソンのあり方を決定した内田魯庵『ジョンソン』

内田魯庵の『ジョンソン』は、『十二文豪』シリーズの付録として明治27年に民友社から出版された。魯庵は築地の立教学校で西洋人から英語を学んだ。東京大学予備門、東京専門学校英語科などに籍を置くが、卒業はしなかった。親戚筋にあたる井上勤の書斎に出入りし、翻訳助手として働くようになった。山田美妙の『夏木立』を読み、感動し手紙を送った。それが『女学雑誌』に掲載された。これをきっかけに、魯庵はその雑誌に寄稿することになった。さらに、『国民之友』において、魯庵はひとかどの文学評論家として論を張った。「翻訳家、外国文学者としての内田さんの功績は、誰しもがいふところで、今更私が何もいふことはないが、紹介の範囲の広いこと、訳文の暢明なこと、学識の深いことなどで当時翻訳王といはれてゐた森田思軒の壘を摩すほどの勢であつた。」（柳田泉 2005c: 76）

英語に長けていた内田魯庵はジョンソンをこう評した。ジョンソンはそのすばらしい名誉に反して、彼の作品は「冗雑蕪曼なる」もので十八世紀の大文豪と呼べるか疑しい。このように、文学者としてそれほど評価をしていないので、彼は自著の例言において次のように語る。「余の

一
二
三

目的はジョンソンの思想よりは寧ろ行実を明かにするにあれば主としてボズウェルの伝に依りて事実を採集しぬ。」(p.1) ジョンソンの考え方や作品よりも、ボズウェルのジョンソン伝に基づき、彼の言動を振り返るというのである。このころ英米においては、ジョンソン伝に基づく評伝もいくつか出版されているが、すべてそれほど長いものではない。筆者は6つほどの文献にあたったが^(注1)、魯庵の『ジョンソン』とほぼ一致するものはない。例言にあるように、特定の一冊をもとに執筆したのではないと結論づけられる。

ジョンソンは、伝記を文学における重要な一領域と考え、『サヴェッジ伝』などを執筆した。魯庵の『ジョンソン』が、啓蒙思想期に特異な伝記や偉人伝の系列に入るとは明らかで、偉人たちの金言や格言も紹介している。このため、この書には至るところに数種の傍点を付された文がみられる。「畢竟放縱怠慢は第一の不徳なればなり。」これらの一部はボズウェルのジョンソン伝にある文で、ジョンソンが語ったとされることばである。また、本書はジョンソンの少年・青年時代の苦勞話にかなりの頁を割いている。これらの点から魯庵『ジョンソン』は、全体として、中村正直の『西国立志編』の線上にあると考えても差し支えないだろう。

同時代の坪内逍遙はこの著作に批判的であった。「蓋し、著者は十八世紀の腐敗を論じて暗に明治の今日を風刺し、ジョンソンの行実を録して暗に明治の文士を諷めんとしたる跡歴々たり。随うて、この伝論は正当の伝論とはいはんよりは、むしろ史伝を材料とした物したる時論とも評すべきもの也、現世の為に物したる傾あり。」(『文学その折々』明治29年、p. 657) このために妥当性を欠く点もあつたり、おもしろいが厳密でなかったりしているというのである。ただし、坪内逍遙のこのことばは、魯庵『ジョンソン』というよりもむしろ、彼が明治27年に書いた「ラセラス伝の作家」の一文に強い影響を受けている。しかしながら、

福原麟太郎はこの本を高く評価している。限られた資料のなかで、全体をうまくまとめたというのである。筆者も同感である。

本書が民友社から刊行されたことにも注目したい。民友社は、明治20年、徳富蘇峰およびその関係者によって設立された。社員には国木田独步や山路愛山や徳富蘆花らがいた。民友社は平民主義を標榜し、政府主導の欧化主義を、貴族的欧化主義を非難した。蘇峰が主張したものは、自尊慈愛の気象や自由主義社会の道義の導入や市民的道徳の滋養などスマイルズの「自助論」に立脚すると考えられる。その雑誌『国民之友』では、進歩的な言論や欧米の社会問題を紹介した。しかし、明治27年に勃発した日清戦争後、蘇峰は帝国主義へと転向し、民友社員の論調が一変した。

魯庵には、同じく明治27に出版した『文学者となる法』という小品がある。ここでもジョンソンがあちこちに顔を出す。「ジョンソン一派がサヴェージの爲に力を尽して奔走せし好話は今の文学界に求めんとするも決して得べならず。(中略)縦令渠は極裡の苦を嘗めて亡びしもジョンソン時代の生れしだけ責めてもの幸福といふを得べし。／ジョンソンは慈善の人なり。乞食は「ジン」或は煙草に浪費する事多きが故に益々之に施与するの必要ありと云ひしほどの慈善者なれば其諸友に接するにあつ厚かりしは当然」(pp. 113-4)「ジョンソンの語を借りて云はゞ“their fondness without benevolence, their familiarity without friendship”信用なき愛好と友愛なき親密を結びて飲んで且つ笑ふだけを主義となす。」(p. 127)確かに、逍遙が指摘するように、ここで魯庵は欧米の作家や作品を引き合いに出して、日本の文学者や文学界を揶揄するのだ。ただし、その扱いはあいかわらず道德家としてのジョンソンの域を出ない。日本の転換期に、この魯庵の『ジョンソン』や他の作品が出版され、これによって明治後期から大正にかけてのジョンソン像はほぼ確立した

といえる。

3.5 内田魯庵『ラセラス』観

『ラセラス』が英学生のあいだで広く読まれるようになると、ジョンソンはその作家として理解されるようになっただろう。『西国立志編』のなかのジョンソン像とは多少異なるが、道德家としての基本像は堅持されている。また、この作品の場合、『ラセラス』の内容それ自体よりも、ジョンソンが母の葬儀費用を捻出するためにこの小品を書いたという逸話が広まり、それを通してジョンソンのこの作品が理解されることになった。これに大きな影響を与えたのが、魯庵の『ジョンソン』である。彼の評伝でも、『ラセラス』執筆に至るまでの少年・青年時代の苦心談が中心である。

魯庵は『ラセラス』をそれほど高く評価していなかったようであるが、同じころの他のジョンソン作品よりはよいとしている。彼の『ラセラス』解釈は平板で、魯庵が何に突き動かされて『ジョンソン』を執筆したかと思わせるほどである。彼は愛読書としてジョンソンの『詩人伝』を挙げているが、『ラセラス』についてはこう語る。「是れ明かにジョンソンの哲学を発表せしものにして『倫敦』或は『人間志望の虚栄』よりは遙に成熟したる思想を含蓄せり。殊に母の喪に丁りて起草せしものなれば憂愁の気仄かに文字の間に纏綿して転た凄然たるを覚ゆ。其一々の妙味に到ては江湖の能く諳んずる所なり。」(pp. 131-2)

魯庵の『ラセラス』観は、評伝『ジョンソン』よりも「ラセラス伝の作家」(『文芸小品』明治27年)により明確に表れている。「『ラセラス伝』の奇構^{でん}と妙想^{きかう}は僅に第三読本^{めいそう}を終りし者^{わずか}猶ほ且つ^{だい}之^{とくほん}を知る。」(p. 204)と述べるが、基本的には「『ラセラス伝』の価値^をに就ては爰^はに説く^{ものな}を要せず。」(p. 203)と論評を避けているようにみえる。魯庵はジョン

ソンの生き方と著作を混同することなく、略伝の記述に終始する。ただし、彼はこの作品をテール小説と位置づけ、他の作家との比較を試みる。「偶々たまたま『ラセラス伝でん』の名想めいさうを發揮はつきしたるものあるも小説家としては勿論もちろんデツケンスに及およばざる事遠こととはし。」(pp. 210-2) また、他の個所では、軽佻浮薄な楽天主義を批判するのが『ラセラス』の主旨だと述べている。

3.6 明治文人の『ラセラス』理解

ジョンソンの受容を論ずる場合、『西国立志編』のなかのジョンソン像と『ラセラス』の解釈や内容を混同してはならない。では、明治の人々は、純粹に文学として『ラセラス』をどのように理解したり評価したのだろう。

明治20年代、我が国の文壇は新しい胎動期に入る。盛んに文芸雑誌が創刊された。明治24年には『早稲田文学』が誕生した。その第53号(明治26年12月)に、鄭漢生(奥泰資)の「おもしろし、ジョンソンの傲慢剛愎」という一文が掲載された。26年1月には『文学界』が産声をあげた。「巖本善治氏が出て居られた『女学雑誌』が次第に耶蘇教に縁故のある若い文学者の作物を発表する檀場になつて来たのは、明治二十五年頃である。(中略)が、巖本氏は宗教家であるのだから、文学者とは一殊に其の『文学界』同人になつたやうな人々とは一大分道徳観も違ふのであつたし、殊にさういふ文学者の連中には、もう既に耶蘇教に対する反対的態度を表明し出してゐる連中さへあつた位であつたのだから、そこで、双方の為に『女学雑誌』とは一向関係のない雑誌を出す方がよからうといふことになつて、愈々二十六年の一月から『文学界』を出すことになつたのであつた。」(馬場胡蝶『明治文壇の人々』p. 520) この『文学界』を吉武好孝は次のように解説する。「外国文学の新鮮な思想や情熱をつぎつぎに紹介した「文学界」は、美にあこがれ、理想に生きよう

とする青年たちの情熱をかたむける場とならざるをえなかった。」(1959, p. 163) ここに、島崎藤村、北村透谷、馬場胡蝶、戸川秋骨、平田禿木らが集結した。会員の多くがクリスチャン、あるいはその影響を受け、そこから西洋の文化をながめた。『文学界』は、尾崎紅葉の硯友社派、坪内逍遙の早稻田派、森鷗外の千駄木派、幸田露伴の根岸派などとは文学観を異にする。

この時代には、文芸結社と称する新しい団体やその雑誌がほかにも誕生した。既に述べた『帝国文学』は明治28年に発足した。このため、以下の記述においても、当時の文壇の状況が反映される。

堺利彦は、没落士族の三男として豊前国中津郡に生まれた。豊津中学校を首席で卒業、明治19年に東京に上京し同人社に入った。おそらく『西国立志編』に動かされたのであろう。「同人社はスマイルスの『自助論』の訳者として有名な中村正直氏の創立した英学塾で、江戸川のほとりにあった。私は初めて東京の桜を江戸川で見た。同人社では、坪内雄蔵さんのクライブの講義が、軍談か講釈を聞くようで面白いという評判だったが、わたしの級ではまだそれが聞かれなかった。わたしはただ、そこで初めて西洋人から英語の会話を教わったが、うれしくてたまらなかった。」(『堺利彦全集 第6巻』法律文化社、p. 64) さらに、一高への合格者が多いことで知られる共立学校で学んだ。校舎は汚かったが、難しい英語の本をいろいろ読むことができて楽しかったと述懐している。スエントンの万国史、マコレーのクライヴ伝、グードリッチの英国史、アーヴィングのスケッチ・ブックなどである。明治20年、第一高等中学校に合格し、そこで多くを学んだ。学科は総て中学校の繰り返しで面白くなったが、数学や地理を英語でやるのが少しうれしかった。今さら十八史略など読まされるにはウンザリした。英語としては、スマイルスのセルフ・ヘルプ、ジョンソンのラセラスなどだった。ラセラスは非常に面白いと

思った。初めて少し深遠な思想に接したような気持ちがしたと、その時代を振り返っている。学費滞納により一高から除籍処分を受けた。大阪や福岡で新聞記者や教師として働きながら、文学で身を立てるべく小説の執筆を始める。明治32年に万朝報に入社した。彼は言文一致体の普及を図る一方で、社主の黒岩涙香、内村鑑三、幸徳秋水らと理想団を結成した。この時期には社会主義思想に共鳴し、非戦論を唱えた。彼には、モリス『理想郷』（明治37年）デッケンス『小桜新吉（オリヴァー・トウィスト）』（明治44年）など多くの翻訳がある。ユートピア文学をはじめ西洋文学の紹介に努めた。

自らを日本のジョンソンと称したといわれる斎藤秀三郎も『ラセラス』にこころを動かされた英学生の一入である。幕末期に、仙台藩士の子として生まれた。世界に恐いものはないと秀三郎は豪語したが、彼が一番恐れていた人物は父であった。明治になり、仙台で英語を知っていたのはその父だけだったという。5歳で仙台の英学校辛未館に入学した。13歳の時に、仙台で斎藤は洗礼を受けた。「元来秀三郎のキリスト教への入信は宗教的に深いものに根ざしていたものとは思われない。彼におけるキリスト教は飽くまで西洋文明の衣を着て輸入された一種の開化思想であったにすぎない。」（大村喜吉 1960, pp. 84-5）その年に、上京して東京大学予備門、工部大学校で学んだ。純粋化学や造船を専攻した。のちに夏目漱石の師となるスコットランド人ディクソンに英語の薫陶を受けた。17歳で工部大学校を退学し、仙台に戻り英語塾を開設した。彼はこの学校において『ラセラス』を講読した。川戸道昭（1997, p. 13）によると、彼は代表的な古典文学の改作をシリーズとして「錦文庫」の名で作成したが、そのなかに『ラセラス』が含まれるという。

土井晩翠は仙台的北鍛冶町にあった質屋に生まれ、明治20年に仙台英学塾に通った。そこで斎藤秀三郎の指導のもと『ラセラス』を読んだ。

翌年、第二高等中学校補充科2年に入学し、明治27年に第二高等中学校を卒業。このころ、吉野作造と知り合った。帝国大学文科大学英文科に入学した。明治29年、『帝国文学』の編集委員を務め、翌年には卒業し、さらに大学院へ進んだ。そこでラフカディオ・ハーンに師事した。明治31年、スコットランドの作家カーライルが書いた『英雄論』(*On Heroes, Hero-Worship, and the Heroic in History*, 1841)を翻訳した。この著作のなかにはジョンソンが何度も登場する。カーライルはジョンソンを高く評価していたからである。「ジョンソン、我は彼を目して生まれながら英国偉人中の随一となせり、剛健考証の人、死に至るまで發揮せずして内に残るもの甚だ多し」(p. 226)「吾はジョンソンの書中、偉大なる知能心意の明跡を見る。咀嚙顛傾甚しきも猶愛すべし。其言は誠実なり、其言中必ず実あり。奇怪な頑固の文体(当時彼が得べき最善のもの)整々堂々として徐歩するもの今は已に陳腐たり。時として内意に込ぜざる誇大浮華の言あり、是皆損て、可ならむ。誇大なるも然らざるも其言常に内に其物を有す。夫の華麗の文体、華麗の書、中に一物なきもの、之を書するは天下の罪人なり。」(pp. 231-2) 晩翠がみたジョンソンは、カーライルの作品を通しての姿であったかもしれないが、それなりの影響を受けたにちがいない。

外山正一は英語英文学教育の充実をはかるべく、東大文科大学学長を務めていたときに英文学講師として招聘したのがラフカディオ・ハーンである。ハーンが英文学を講じた際の学生による講義録が残っている。『英文学畸人列伝』(*Some Strange English Literary Figures of the Eighteenth and Nineteenth Centuries*)は18~19世紀の文人を論じながら、ジョンソンは登場しない。むしろ、ジョンソンが大嫌いだったマンデヴィルを偉大な思想家として取り上げている。ハーンの『英文学史』にジョンソンの名は記されているが、その扱いは好意的なものではない。

「ジョンソンは徹底した古典主義者で、保守主義者である。彼はこの時代のあらゆる文学上の偏見の代表者であり、ロマンティックな文学の敵とみなさなければならない人物である。」(『ラフカディオ・ハーン著作集』第11巻、恒文社、pp. 355-6) 彼の作品の大きなものは英語辞典で、ほかは量的にも内容的にも大したものはないとぼささり切り捨てた。「彼の作品の大きなものは、二巻本の『英語辞典』 *A Dictionary of the English Language* (1755) であるが、それ以外には驚くほど少ない。母親の葬式の費用を作るために二週間で書きあげたという『ラセラス』 *Rasselas, The Prince of Abissinia* (1759) と『詩人伝』、これは今ならごく小さい本に圧縮できる。(中略) これは同時代の人たちの想像を絶した多作に比べると、いささか寂しい。ジョンソンの全著作は、辞書を除くと、簡単な一冊の本に入ってしまう。だから、彼が作品によって英文学に影響を与えたとは言い難い。そしてまた、それでよかったのだともいえる。というのも、本当のところ、ジョンソンの文章は非常に下手なのである。不正確という意味ではなく、よい趣味とかよい英語などという点から見て、問題にならぬくらい下手である。」(前掲書、p. 365) かなり辛辣な批判を加えている。

ハーンが「英語を以て自己を表現する事のできる一万人中唯一人の日本人学生」とその才能を絶賛したのが、上田敏である。彼は、私立東京英語学校、第一高等学校を経て、東京帝国大学英文科で学び、明治30年に卒業。東京高等師範学校で教授となり、ハーンの後任としてアーサー・ロイドとともに採用され東大講師を務めた。このような事情から『帝国文学』に多くの文を寄せた。上田は河野六助訳『王子羅世刺斯伝』(明治38年)に9頁にわたる長い序詞を書いて、そこでジョンソンの紹介をすると同時に『ラセラス』論を展開した。明治におけるもっともしっかりした評論であろう。『『羅世刺斯伝』は其結構素と一篇の小説に擬した

れども、実は著者が生平の蘊蓄を傾倒せる長論議にして、脚色の巧妙、性格の描写を虧^かきたるも、道德、教法の難問、論策に亘りて、竦絶の見を樹てたるもの多く、忽ちにして文界の歓迎する所となり、終に永く英国小説の一名著と仰がる。」(p. 2) 性格描写や筋立てなど問題あるとしながらも、一大傑作だとしている。さらに、この作品における著者の「世相観は沈痛厭世の風を帯びて」(p. 3) としつつ、文体は「勁健莊重の妙ありて、章句自ら台閣の風を具ふ。謹嚴の文、時に或は諧謔、機知の露出するあるも亦一奇ならずや。」(p. 3) ラテン語語源の多いことや連句の美にも言及している。さらに次のように語る。「徒にジョンソンの駢驪体を誦りて、此類の名著を貶さむとする者は、道德途説の為に左右せらるゝ一知半解の徒に過ぎず。」(pp. 3-4) 対句を基本とする駢驪^{べんれいたい}体を責めて、ジョンソンの書を貶すことのないように警告している。

夏目漱石は、明治29年、第五高等学校の英語教師として熊本に赴任した。明治33年には、文部省より英語研究のため英国留学を命じられた。ロンドンではメレディスやディケンズを読み漁り、英文学や文学論の研究にいそしんだ。しかし、猛烈な神経衰弱に陥り、急遽日本に帰国した。帰国後の明治36年に、東京帝国大学でハーンの後任として教鞭をとった。彼の分析的な硬い講義は不評で、学生から八雲留任運動が起こったほどである。翌年の暮れ、虚子の勧めで精神衰弱を和らげるために『吾輩は猫である』を執筆した。これが処女作で好評を博した。その後、職業作家としての道を歩み始め、『虞美人草』を連載で書いた。漱石の作品は世俗を忘れ、人生をゆったりと眺めようとする低徊趣味(彼の造語)が強く、当時の主流であった自然主義と対立する。大学在職中の講義録をまとめた『文学評論』(明治42年)は、18世紀の英文学を主題とするもので、当然のことながらそこではジョンソンが論じられる。ところが、その扱いはぞんざいなもので、彼の作品にはほとんど触れずいくつかの

逸話を紹介する程度である。「ジョンソンは「酒肆の腰掛は人間の幸福の王冠なり」と云った事がある。」(p. 117)「例のジョンソンはボズウェルの云へる如く倶楽部向きの男 (clubable man [sic]) であつて生涯中色々な倶楽部に關係した」(p. 122) 彼のジョンソンに対する評価の低さが如実に表れている。確かに、彼のいう低徊趣味とジョンソンの文学観とは相いれない。

大和田建樹は安政4年(1857)に宇和島藩士の家に生まれた。藩校の明倫館で学び、明治9年には広島外国語学校に入学した。明治12年、上京し交詢社の書記となり、交友関係を広げた。明治19年には、東京高等師範学校教授となった。国語国文学の分野で活躍した人物であるが、彼には『英米文人伝』(明治27年)という作品がある。35名の文人の一人としてジョンソンを取り上げ7頁の略伝を客観的に記している。「野鄙なる容貌の人粗衣を纏ひ。灰色の髪を乱して衣半椅子にもたれつゝ茶を喫するを見る。而して厳格なる問答を發する毎に、轟然『君よ』と一言するを常とせり。是れ即ちクラブ街の不潔なる土窖より登りて。英国批評家の王位を占めたるサミュエル、ジョンソン博士の晩年たり。実に『ラセラス』『龍動』『ラムバー』の名文を書き。『大英辞書』を編纂せしは此偉人なりとす。」(pp. 71-2)各作品に対する寸評もみられる。「『サヴェージ伝』『人間希望の空虚』悲曲『イレン』の如きは傑作と評する能はざれども(中略)『ラムバー』に到りては以て散文大家の名を得せしたり。」(p. 74) なお、明治28年には、東京帝国大学文科大学の井上哲次郎、上田万年、上田敏、高山樗牛らが組織した帝国文学界の機関誌として『帝国文学』が発刊されたが、大和田もここで活躍した。

自らの作品のなかに『ラセラス』やそのなかからの箴言を挿入した作家もいる。

坪内逍遙は美濃国加茂郡で生まれた。名古屋へ移り、その洋学校、

東京大学予備門（のちの第一高等学校）を経て、東京大学文学部を卒業し文学士となった。その後、東京専門学校講師となり、早稲田大学教授となった。26歳のおりに、評論『小説神髓』を発表した。江戸時代からの勧善懲悪の物語を否定し、心理的写実主義によって日本の近代文学の誕生に大きく貢献した。その理論を实践すべく小説『当世書生気質』を著わした。この作品（第十四回）のなかで交わされる書生の結婚談義のなかに『ラセラス』からの寓言が挿入されている。「女房特にハ苦勞多く独身者にハ楽しみなし」この取り上げ方は逍遙のジョンソンに対する態度を物語っている。なお、この小説に対して内田魯庵は愚作だと厳しい評価を与えている。逍遙には『文学その折々』（明治29年）という作品があり、そのなかの「時文の傾向」において『ラセラス』に言及している。「ジョンソンが其の咄嗟の作『ラセラス』に於て（其の咄嗟の作なるだけになかなかに彼が真の情懷を）表白せし厭世的樂天主義が、人間の禍福を見ず能はずして、常に一個人の幸不幸にのみ着眼したるかを見ざるか。」（p. 377）また、明治34年に出版した『英文学史』においては次のように述べている。「リチャードソンの筆法を進めて一段哲学的たらしめしものを博士サミュエル、ジョンソンの『ラセラス物語』（“Rasselas, Prince of Abyssinia”）となす。是れ作家が窮困のうちに母を喪ひ、其の葬式の費用に充てんとて、筆を執ること僅か八夜にして作りき、と伝ふる作なり。人生の希望の大かたは空だのめなる由を有形に写しだしたる寓話小説なり。十八世紀の後半を代表せし一大家の人生觀を窺う料として永く読まれるべき運命を有す。」（p. 477）逍遙の『ラセラス』に対する態度も、魯庵の『当世書生気質』批判も、所詮はそれぞれの文学觀によることは明白である。逍遙にとって小説とは次のようなものである。「小説の主腦は人情なり、世態風俗これに次ぐ。人情と世態風俗は世に在りては、人情といふや。曰く、人情とは人間の情慾にて、所詮百八煩

悩是れなり。夫れ人間は情慾の動物なれば、いかなる賢人、善者なりとも、未だ情慾を有ぬは稀れなり。(中略) よしや人情を写せばとて、その皮相のみを写したるものは、未だ之を真まことの小説とはいふべからず。その骨髓こつずいを穿つに及び、はじめて小説の小説たるを見るなり。)(『小説神髓』岩波文庫、pp. 50-2)

国木田独歩は、東京の学校で英語教材として使われていた『ラセラス』を読み心を動かされた。彼の作品『帰去来』(明治34年)に登場するほどである。主人公は4年ぶりに故郷に帰るという設定である。「『世界を家となす!』結構な話である。勇ましい文句である。併し其故郷に於てかくじつせいきわつうちかぎへいわきやうゆううんめいすこがねやま確実なる生活の中、限りなき平和を享有し得る運命を棄て、黄金の山でも発見するやうに、騒いで、浮立つて、天涯万里に流浪するのがめでたい事であらうか。幸福であらうか。』(『国木田独歩 第二巻』学習研究社、p. 327) この問いかけは、まさにラセラスの声ではなからうか。主人公は松の根に腰をかけ、懷から一冊の本を取り出す。「書はラセラス伝である。自分は幾度もこの書を読だ。然し依然として我愛読書の一たる真味を失せない。読み読みて幾干もなく、身の此谷に在るを忘れ、心はアビシニヤ「幸福の谷」を辿つて居る。あゝ人は幸福の谷に住みながらも、年若き血の更に幸なる原をもとめて流れ出でんことを希ふものかなと思ひつゞけ、何時しか波瀾なけれども却て春海一望、霞の如きジョンソンの筆は自分を捉へて容易に放たず、斯くて時の経つのを忘れて居た。」(上掲書、p. 332) この短編小説の伏線として『ラセラス』がある。独歩がジョンソンの作品を読んだころの思いを下地としている。それは暗い運命的な人生観で、彼の描く帰郷者は、敗北者、敗残者、挫折者である。これとは対照的な作品が『非凡なる凡人』(明治36年)である。主人公は生きた『西国立志編』とまで呼ばれた人物で、その本を暗唱するほど熟読した。彼は自助の精神を理解し、将来の大望をおおらかに語

り、現実の困難をはねのけ自己の活路を切り開いた。虚栄心のまったくない主人公は「平凡なる社会が常に産出し得る人物」であり「平凡なる社会が常に要求する人物」である。「非凡なる凡人」は、スマイルズが本来求めた「産業を中心とした市民社会における有為な人格の持ち主」を描いたものだといえる。

明治20年、独歩は父の反対を受けたが上京し、翌年東京専門学校英語普通科に入学した。のちに徳富蘇峰の知遇を得て、大いに影響を受け文学の道を志した。このころから教会に通うようになり、日本基督教会の指導者植村正久を崇拜する。24年には彼から洗礼を受けた。正村白鳥の独歩評は、彼の文学観をうまくいい表している。「著者は叙述の方法も文章も不器用だ。思ついてまゝを写さずして、それを一生懸命に廻り遠く、勿体ぶつて書いたり、感じもしないのに、やれ空がどうであつたの、月がどうしたのと、泣いたとか笑つたとか、見えすいた虚言^{うそ}をつくのを絶好の美文だとして見れば、著者の文章は露骨で不整頓であるが、吾人には其の思想を最短距離の文字によりて写したのがうれしい。」(『日本現代文学全集30』講談社、p. 412) さらに、こんな風に結論づける。「独歩は傑れた作家であつた。「人生とは何ぞや」についてつねに考へてゐた作家であつた。」(『我が生涯と文学』新生社、p. 25)

北村透谷は没落士族の家に生まれた。明治16年、東京専門学校政治科に入学したが、卒業はしていない。自由民権運動に参加するものの、同志の行動に絶望し運動を離れた。明治21年、教会で洗礼を受けた。明治26年に創刊された『文学界』誌上に、「人生に相渉るとは何の謂ぞ」「内部生命論」など多くの文芸評論を執筆した。「博奕^{ばくえき}」(ばくち)に関して述べた文章にジョンソンが登場する。「戦争は其父なり、運命は其母なり、而して博奕^{ばくえき}はこの父母の間に生まれたる盲目の驕児なり。(中略)空虚なる時間は人をして不善なる欲を発せしむと博士ジョンソンの言ひける

は、尤も明らかに人間の弱性を指摘し、博奕の普遍を説明するに足れり。空虚なる時間は、空虚なる心をもてるもの、常に有^もつところなり、而して凡ての情欲は、恰もこの空虚の時間を填充するが為^きに入り来るもの、如し。」(『透谷全集 第二巻』岩波書店、p. 71) 彼にとって、文学は life の問題であった。ライフ、生命、人生、生活こそが、文学において論じられなければならなかった。そこで、このような批判が飛び出す。「例の口^き善^が悪なき京童達は、高踏派とは足の無き仙人の事なり、足の無き仙人とは「文学界」の連中であらうなど言散らして、矢鱈に仙人よばりせられんは余り嬉しき事にあらず。尤も「高踏派」一条は、「人生問題」とは全く離れたる者なり。人性といふ字も人情といふ字も余り見受けざれば、京童が誤解の種も自然少なき筈なり。(中略) 余(「文学界」といふ団体を離れて)と愛山君との議論の焼点は、文学は必らずしも写実的の意義を以て人生に相渉らざる可ならざるか、或は又た理想といふものを人生に適應することを許すものなりやの如何にあり。」(「人生の意義」前掲書、pp. 232-3) この言のように、漱石や鴎外は高踏派と呼ばれ、自然主義が盛んであった当時の文壇とは一線を画していた。

『ラセラス』の受容だけでなく、明治前期の文学における諸問題を考察する場合、そこに基督教の影響を無視することはできない。国木田独歩にしても北村透谷にしてもクリスチャンであった。「明治の初期に欧米の文明が崇拝され模倣されるとともに、基督教も輸入されて、一部の青年の新思想新情調の源泉となつた。陳腐を嫌ひ新奇を求める青年は、伝統的の仏教よりも、外来の基督教によつて、若い精神を躍動させたのであつた。」(正宗白鳥『古典文学論』p. 161) この流れの先頭に立つのが日蓮宗の家に生まれた中村正直であり、旗本の出であった植村正久であろう。

植村正久の家は、王政復古とともに没落した。家運挽回を期して正久

は英学に足を踏み入れた。横浜にあったバラ宣教師の私塾で学び、16歳のときに彼から洗礼を受けた。明治11年には、さらに横浜のブラウンが創設した英学校に入学した。斎藤勇の「植村正久先生の文学的寄与」はとても興味深い文章である。植村とジョンソンは親子か兄弟のように似ているというのである。「一、いづれも若い頃、貧困に苦しんだことは言ふに及ばず、癩癰のジョンソンと腎臓病の先生とは共に病苦の人である。風采のガッシリした、岩が立つてゐるやうな体格、驚くべき精力等に於ても両者の共通点が発見される。二、独立心の旺盛なることも似てゐる。(中略) 三、その偏見と堅実さに於ても両者の間に類似点がある。(中略) 四、貴族と奴隷とを一視した点において両者共通である。ジョンソンは保守党にくみしたが、しかも貴族に下らず、却って奴隷に対する思ひやりが深かつた。しかも頑固で保守的であつた。先生が保守的であつたかどうかはともかくとして、所謂デモクラシーに対する世間の嘲し方には多少不服を感じて居られた様子である。五、両者とも豪放にしてしかも柔和、粗暴にしてしかも思いやりが深かつた。六、真面目であつてしかも快活、そして常に友情を重んじ、子弟を愛した。七、激動と熱涙との人であることについても相類してゐる。八、二人とも町が好きであつた。九、ジョンソンは座談家として古今第一であつたと称せられてゐるが、先生も亦実にすぐれた座談家であつた。」(1939, pp. 222-3) また、植村は、上流階級、中流階級、ホワイトカラー層中心の教会を作り、「吾輩の教会に車夫、職工の類はいらない」といって無学な者を排除した。これは、ジョンソンが愚者を軽蔑し読者を教養のある者たちに限定したのと通ずるものがある。

高橋五郎は、植村正直の紹介で宣教師ブラウンに師事し、『新約聖書』の邦訳にもたずさわった。彼は明治9年にバラから洗礼を受けた。高橋といえば、人も知る語学と文学の大家で、数多くの翻訳書を残した。『ファ

ウスト』『ベーコン論説集』『セネカ論説集』『エマーソン社交論』『カアライル論文選集』『モンテヌ随筆集』『プルターク英雄伝』などである。彼は『人生観』（明治36年）において、ほぼ17頁にわたり『ラセラス』について論じている。これほど長い紹介文の裏には、高橋のジョンソンに対する強い思いが感じられる。王子ラセラスのさらなる幸福を求める旅をこう語る。「如何なる安楽境にまれ、其中に幽閉せられをりては、人性決して満足する者にあらず、果然ラセラスは（中略）一層幸福なるべき郷土を求めたり、然れども獲ざりき（中略）断じて幸福は此に在らず、要するに、富者の生活は凝惧の生活なりけり、」（pp. 14-5）ただし、高橋はジョンソンの人生観には賛同できないようである。「幸福は決して求めて獲べき者に非ずてふジョンソンの人生観なり。（中略）ジョンソンの人生観は失望を以て始まり、失望を終れる者にして、所謂アキラメ哲学なりとす。決して欣喜雀躍すべき底の人生観に非ず。只著者ジョンソンの有神主義斯く其筆法を謹嚴ならしめたる而已。ジョンソンは此世を以て心魂を練るの場と為し無窮の未来に対する薰陶所と為せし也。」（pp. 24-5）

植村正久から洗礼を受けたのが、正宗白鳥である。彼は、明治25年に『国民之友』でキリスト教を知り、近隣のキリスト教講義所に通ったりした。また、内村鑑三の著作などで聖書を熱心に勉強した。彼が私塾にいたころ、民友社からの出版物はほとんど読んだという。「一徹な崇拜心と旺盛な読書欲とによつて、解つても解らなくても面白くても面白くなくても、やたらに読んだ。民友社独特の生硬なキザな文章をも有難がつて、お経のやうに読んだ。」（『正宗白鳥全集 第十二巻 回想』p. 46）明治29年に東京専門学校に入学し、翌年には洗礼を受けた。こんな白鳥が明治30年前後に『ラセラス』を読んだと語っている。「学校では、私の入学当時、坪内先生がラセラスを講じてゐた。私が知名の文学者の面

目に接したのはこれがはじめてゝあつた。語学として習つたので、ことにはじめの方を少し読んだだけなのだから、ラセラスの面白味はいまだに解せられないのであるが、ジョンソンが母親の葬式費をつくるために一週間で書き上げたといふことが私を感動させた。」（『私の文学修業』p. 48）この逸話に触発されて、白鳥は薬代を稼ぐために小説を書き始めたという。クリスチャンであつたが、彼の思想は「シニシズムの哲学」といわれる。真の人間的生活のために世俗的慣習を蔑視するのがシニシズムならば、熱心な国教徒で風刺に長け俗を軽蔑してやまなかつたジョンソンの考え方や生き方と完全に重複する。また、白鳥の次のことばは彼の文学観をよく表している。「古今の名作を読んでゐた私は、技巧が下手でも内容が今傑れてゐるといふやうな批判に甘やかされる訳にはいかなかつた。仮にも文学である。内容だけの文学といふものは価値がある訳はないとひそかに思つてゐた。そこで、私は努力を続けた。自分で技巧の拙劣を百も承知してゐるため、人一倍骨を折つた。」（p. 53）この観点から漱石の作品の弱点を指摘し批判し「私はこの頃になつて、夏目漱石の長編を幾冊か読んだが、よく知られた嘘の話のやうに感ぜられてならない。」（p. 54）と述べた。

『ラセラス』に対して好意的な評価を下した人たちだけではない。ハー
ンも批判的であつたが、増田藤之助も「ジョンソン氏「ラセラス伝」詳
注発端」（明治25 - 26年）において、この作品の英文は英語を学ぶ者の
模範とすべきものではないと厳しい評価をしている。しかしながら、『ラ
セラス』の作品と真摯に向き合つた明治の人々は、ジョンソンの格言や
ジョンソンの逸話に惑わされることなく、その作品の文学的価値（時には
英語教科書としての教育的価値）を正しく認識している。そこには、『ラ
セラス』を単純に西洋的な道徳書とする考えなど一切ない。上記の文人
たちの一つの特徴はクリスチャンが多いことである。当時の文壇の状況

を馬場胡蝶はこう語る。「『文学界』の創立者等は、兎に角孰れかの耶蘇教の教会に籍を置いた人々である。その当時の耶蘇教なるものは可成り新知識の進歩主義の人々を集めてゐた。が、しかし、さういふ人々の中心思想は、東西の古い道徳から何程も脱出してゐるのではなかつた。」（『明治文壇の人々』 p. 523）

4. ジョンソン受容第3形態のまとめ

ジョンソンの『ラセラス』は明治中期に広く読まれたが、ジョンソンや彼の作品の理解は中村正直の『西国立志編』の影響下にあったといえる。『ラセラス』で示された西洋のモラルは、明治日本においては、儒教的な道徳として理解された可能性が高い。この書が英語教科書として広く利用された理由の一つは、それがもつ教育的啓蒙的内容によると思われる。「S・ジョンソンの『ラセラス』やB・フランクリンの『自叙伝』など、一種の人生指南の書物が英語テキストとして広く全国に流行したというのは、かつての儒学ないしは漢学を修得する際の四書・五経に相当する役割がそこに託されていたということを物語るものであろう。」（川戸道昭 1994: 89）ジョンソンおよび『ラセラス』の明治期における受容の基本はこの通りである。

ただし、『ラセラス』の作品と真摯に向き合った明治の若者も多くいた。彼らは、ジョンソンの格言や逸話に惑わされることなく、人間の存在や理想を考えるなか、その文学的価値をその作品に見出していった。そこには、『ラセラス』を単純に西洋的な道徳書とする考えなど微塵もない。この作品に心を動かされた文人たちのあいだには二つの特徴がみられる。一つはクリスチャンが多いことである。この点と関連し重要なことがある。明治30年代半ばは、悲惨（深刻）小説や観念小説が流行した時代だという点である。日清戦争後、死や貧窮や病苦など人生の暗黒面を

もっぱら描いたのが悲惨小説で、作者が時代の社会や世相などから触発された観念によって明治資本主義社会の内面に潜む矛盾や問題点を指摘する形で明白に打ち出しているのが観念小説である。

二つ目の点は、『ラセラス』を高く評価した作家たちの多くが、文学をことばによる単なる娯楽だとは考えていなかったということである。その文学観は真摯で、透谷に象徴されるように「生」と真剣に向き合い人生いかに生くべきかの問題として文学と対峙した文人たちである。逆に、漱石のように一般的に高踏派と呼ばれるような作家たちはことごとく『ラセラス』を冷評した。どちらの文学観が正しいかという問題ではなく、まさに明治20年代の文壇における文学論争がそのままジョンソンの受容にくっきりと投影されていることがわかる。

(注1) 例えば次のものがある。

Piozzi, Hester Lynch, *Anecdotes of the Late Samuel Johnson, LL.D. during the last twenty years of his life* (1786, London)

Thomas Carlyle, *Samuel Johnson* (1853, London)

Alexander Main, *Life and Conversation of Dr. Samuel Johnson* (1874, London)

Sir Walter Scott, *Biographical Sketch of Samuel Johnson, etc.* (1876, London)

Leslie Stephen, *Samuel Johnson, LL.D.* (1878, New York)

Francis Richard Charles Grant, *Life of Samuel Johnson* (1887, London)

参考文献

九三

井上 健『翻訳文学の世界：近現代日本文化の受容と翻訳』思文閣出版、2012。

大村喜吉『斎藤秀三郎伝』吾妻書房、1960。

岩崎文人「『非凡なる凡人』論—独歩＜精神革命＞のゆくえ—」『近代文学試論』（広島大学近代文学研究会）第21号（1983）、pp. 9-16。

川戸道昭「明治時代の英語副読本（I）」『英学史研究』第27号（1994）、pp. 89-106。

川戸道昭「明治時代の英語副読本（II）—外山正一と東京大学刊行英語テキスト—」『英学史研究』第30号（1997a）、pp. 73-91。

川戸道昭「明治時代のサミュエル・ジョンソン—『ラセラス』の流行とその背景

- 一」『人文研紀要』（中央大学人文研）第11号（1997b）、pp. 1-31.
- 斎藤 勇「植村正久先生の文学的寄与」『植村正久文集』岩波文庫、1939.
- 佐藤美希「翻訳序文に見る明治の英文学翻訳」『通訳研究』第6号（2006）、pp. 49-68.
- 中山幸三郎「ドクター・ジョンソンと植村正久」『紀要』（大東文化大学）第1号（1969）、第2号（1970）、第3号（1971）.
- 野村 喬『内田魯庵』リプロボート、1994.
- 柳田 泉『随筆 明治文学3』平凡社、2005c.
- 吉武好孝『明治・大正の翻訳史』研究社選書、1959.